

坂中さんが人間関係研究センターに遺してくれたもの

南山大学人文学部心理人間学科 中村和彦

今から10年前、坂中さんが福岡教育大学に所属していて、南山大学に移籍する人事が決定した頃、私は坂中さんと話す機会がありました。坂中さん「エンカウンターグループの私でいいんですかねえ」、私「去年(2011年)に逝去された山口先生がよく、Tグループとエンカウンターグループはカステラのようなものだと言っていたんです。〇〇屋と□□堂のどちらが美味しいと争っても意味がない、どちらも美味しいし、どこのお店のカステラも基本的な材料は同じだと」、坂中さん「あ～、なるほど、どちらも同じグループアプローチですからね～」。

2013年3月末、坂中さんが名古屋に引っ越してきて、松阪で行われた心理人間学科の教員合宿に参加してくれました。その時、お土産として長崎のカステラを持ってきてくれました。坂中さん「私が来たことの象徴としてカステラを持ってきました～」、そして2013年4月に、南山大学教授、および、人間関係研究センター員としての坂中さんの日々がスタートしました。坂中さんが南山大学に来てくれたのは大きな喜びでした。

2013年度と2014年度には、スタッフとしてともにTグループ合宿を運営しました。坂中さんは、ねらいの設定や夜の集い、全体会での学びの記入などについて素朴に疑問を言ってくれて、私が今までTグループで当たり前だと思っていたことを再考するきっかけを与えてくれました。あの頃の私は、間もなく坂中さんが病氣と闘うことになるうとは、そして、あまりに早く逝去されることになるなんて、想像もしていませんでした。

坂中さんの闘病中は、ご自身のアイデンティティがPCA(パーソンセンタード・アプローチ)であると明言し、ラボラトリー方式の体験学習についての人間関係研究センターでの議論でも明確に主張していた、印象的な場面が2つありました。

1つ目は、センターのミッションを検討する話し合いで、「多様なあり方を尊重する」という言葉を入れたいと発言したことです。日頃は強く主張することは少なく、会議中でも聴くことが多い坂中さんでしたが、この時ははっきりと「その人がその人らしく存在することができる、『多様なあり方を尊重する』という言葉を入れたい」と主張していました。グループの中でもその人がその人らしく存在することを大事にしていた、坂中さんらしい想いです。そして、坂中さんらしさを受け継いでいるのが、人間関係研究センターのミッション「多様なあり方を尊重する、人間性豊かな社会を創り出すために」という言葉です。

もう1つのエピソードは、各センター員が1つは人間関係講座を担当することが検討されていた頃のことです。坂中さんは「多様なあり方を尊重するセンターでは、センター員はやりたい講座をやるのが大事なのでは」と強く主張しました。

その後、当センターとしては、全センター員が人間関係講座を1つは担当するという前提としないこと、多様なセンター員がいて、それぞれのやりたいことが実現できるセンターであることが大切、ということが2019年度に決定されました。この方針も坂中さんが私たちに遺してくれた、「多様なあり方を尊重する」姿勢なのです。